

『風呂と愛国：「清潔な国民」はいかに生まれたか』

川端美季*著、NHK 出版新書、2024 年

戸 谷 洋 志[†]

本書は、日本人は風呂が好きな国民である、という言説が、どのように歴史的に構築されてきたのかを、歴史社会学的な手法によって解明したものである。著者の川端によれば、その決定的な契機となったのは、明治時代における国民を統合する新しい道徳的規範であり、特に「忠君愛国」という理念だった。こうした言説が形成されていく過程に対して様々な観点から多角的に光を当て、「風呂と愛国」の密接な関係を立体的に描き出していく点に、本書の独自性がある。

第1章では、日本における風呂文化が形成された起原を辿るために、前近代における風呂のあり方の歴史的な変遷が論じられる。その過程で、特に今日の日本人と大きく感覚を異にする事象として、混浴への態度が挙げられる。同時に、幕末に流入してきた西洋人の「まなざし」に触れることで、混浴がそれまでと違った形で理解されていく様子が追跡される。

第2章では、明治時代における風呂のあり方について、それが国家権力によっていかに管理・統制されていったのかが論じられる。川端によれば、警察組織の発足によって、国民の衛生を管理するという目的のために、湯屋が公的な取り締まりの対象となった。それによって国家と風呂の関係はかつてないほどに密接になり、風呂のあり方もまた変質していった。

第3章では、江戸時代から明治時代にかけて、入浴という行為の意味がどのように変遷していったのかが、養生法の観点から検討された。江戸時代において、風呂に関して養生として語られていたのは、入浴し過ぎないようにすることだったが、明治時代になると、西洋近代医学の視点から医療の一貫として、入浴が積極的に勧められるようになる。その最中で、西洋に対して日本を対抗させるために、日本人は風呂が好きであるという言説が構築されていった。

第4章では、欧米の入浴や公衆浴場の歴史が振り返られ、それが日本へと輸入・定着していく過程が描かれた。19世紀になると、西洋では清潔さが道徳的純潔として捉えられ、規範的な意味を帯びるようになった。公衆浴場は、当初は上流階級の人々しか利用できないものだったが、やがて社会階層が低い人でも利用できるように、公衆浴場運動が起こった。その理念は、明治期の日本の社会実業家たちを感化し、日本における独自な公設浴場の設立へと導いていった。

第5章では、明治時代から大正時代にかけて成立した家政学において、入浴がどのように位置づけられたのかが検討された。そこでは、家庭の衛生を守ることで一国の衛生を守ることが母の役割

* 立命館大学衣笠総合研究機構准教授

† 立命館大学大学院先端総合学術研究科准教授
toya@fc.ritsumei.ac.jp

として説明され、入浴はそうした仕事の一つとして捉えられた。その過程で、入浴習慣と国民性は一体のものとして説明され、潔白性が重要な美德として定着していった。

第6章では、「国民道徳」の形成過程で清潔さが道徳的な概念へと昇華されていく様が検討された。国民道徳とは、道徳によって日本人を結びつけようとする運動であり、清潔さは「潔白」という概念とともに提示された。

第7章では、学校教育の領域において、入浴と清潔さをめぐる言説がどのように論じられたのかが検討された。教科書記述において、清潔さは「つよい日本人」を育成するための手段として捉えられ、戦時下にはその傾向が軍国主義へと結びついていく。同時に、美德としての清潔さは、その対比となる不潔なものを顕在化させることで、説明されていった。

本書は、一般的には隔たりがあるようにも思われる「風呂と愛国」の関係を、緻密な資料分析に基づいて解明し、それによって現代の日本社会においても、明治期の国民道徳の残滓が形を変えて息づいていることを明らかにしている。それは、私たちが自明としている日常生活を、新たな視点で捉え返すことの重要性を力強く確信させるものである。その一方で、読者としてはもう一歩踏み込んだ議論を展開してほしいと思われる点もある。

第一に、道徳的な美德としての清潔さという概念に、日本と西洋との間にどのような違いがあるのか、ということだ。日本において、国民道徳を構成する美德の一つとして清潔さが捉えられていく。その一方で、西洋においても、18世紀以降、清潔さは道徳的な美德として捉えられていた。もしも、その美德の内実を比較したとき、そこに何らかの差異があるならば、それは日本と西洋の社会構造の違いを鋭く反映したものになるだろう。なるほど、こうした問題について、断片的にではあるが川端は手がかりを与えてくれている。しかし、それらを踏まえたうえでより本格的に両者が比較考察されうるなら、それは大いに興味をそそられるテーマである。

第二に、近代以前において、清潔さがどのような道徳的美德であったのか、ということも、もう一段深い議論を知りたかった。本書において、近代以前に関する議論は第1章で展開されるが、そこでは主として風呂の形態だけが問題となり、清潔さという概念そのものは検討の対象となっていない。しかし、周知のように、古代日本において尊ばれた美德は「清き明き心」とされ、そこでは穢れのない純粋さが重視された。こうした美德は神道における禊の概念にも反映されており、川に入つて体を洗うことは、単に養生や衛生のために行われたのではなく、宗教的な儀式としての性格を持っていた。明治期における清潔さの美德化は、こうした日本の文化的・歴史的背景を利用したものであると考える。そうであるとしたら、美德としての清潔さは、近代以前と以降とで、どのように変容したのだろうか。そして、こうした変容を被っているがゆえに、今日の私たちからはもはや認識できなくなってしまった、近代以前の美德としての清潔さも、存在するのだろうか。それもまた、興味深い問題である。

もっとも、以上の2点は、本書に対する批判ではない。むしろ、こうした多様な気づきや疑問を触発してくれるという点にこそ、本書の最大の魅力が存するのではないだろうか。